始まっています　地域内交流！

活動に必要な資金や野菜などは自分たちで調達！
「第13団地なかよしサロン」

第13団地なかよしサロンは、社会福祉協議会の働きかけもあり、平成15年に発足した。自治会とは別組織で、坂本恒男さんが代表を務める。また、行事を実施する推進委員会も組織されている。現在は、7～8人の役員がサロンの運営にあたっている。サロンの運営資金は、社会福祉協議会の補助金のほか、年6回実施している資源回収の収益金で賄われているため、自治会から補助を受けずに運営されている。

主な行事は、子どもを交えて行う「ソーメン流し」、70歳以上の人を対象とした「敬老会」、そして皆で鍋を囲む「芋煮会」である。参加者は毎回30人ほど。それぞれの行事で使用する野菜は、「なかよしサロン農園」と名づけられた農地で収穫された里芋、ネギ、大根、白菜などを使用する。農園の広さは1町歩ほどの面積を誇る。当初は、1人の会員が地主から畑を借りて野菜作りをしていたが、徐々に仲間が増えて、現在は9人が耕作を楽しんでいる。「始めは、木の根や篠を抜いて畑を作ったので大変でした。でも、現在は仲間も増えて、皆で農作業を楽しんでいます。畑に行くと、誰かが来ているので、休憩時間には、自作のビニールハウスで仲間とお茶飲みを楽しみます」と坂本さんは話してくれた。

ソーメン流しの様子

また、この農園が「なかよしサロン農園」と名づけられているのには理由がある。農園では、2月上旬にふきのとうの天ぷら会、4月上旬には桜の花見会、秋には収穫祭が開催される。この農園で行われるこれらの行事もサロンの一環になっているからだ。坂本さんは、地区内で行われるサロンの行事に加えて、農園を通じて様ざまな人が集まり、交流できる場にできたら良いと考えている。

最後に、「高齢者のなかにはサロンに来ない人もいますが、その場合は呼びに行きます。それでも来ない人はいるので、その人をどう参加させるかが今後の課題です」と話してくれた。

もろ山歴史散歩
文化財シリーズ214
やぶさめサミット余話③
～特定の家で継ぐ流鏑馬～

去る1月16日、ときがわ町の萩日吉神社で3年に1度の流鏑馬祭りが行われました。萩日吉神社流鏑馬保存会は、昨年秋に開催したやぶさめサミットにも参加し、シンポジウムでは流鏑馬の「家・世襲」を課題とするグループで事例発表を行いました。なぜなら萩日吉神社の流鏑馬は源義賢・義仲父子の家臣七苗（氏）により奉納される流鏑馬で、七苗の特定の家によって行われているからです。

特定の家が流鏑馬を奉納

毛呂山の場合、流鏑馬は地域ごとに当番が回ってきますが、萩日吉神社の流鏑馬は地域ではなく、家ごとに当番が回ります。その家とは、ときがわ町の明覚郷と呼ばれる地域（現在のときがわ町大字田中・馬場ほか）に住む馬場家・市川家・荻窪家の三苗と、小川町で大河郷と呼ばれる地域（現在の小川町大字腰越の一部）に住む横川家・小林家・加藤家・伊藤家の四苗です。毎回の流鏑馬では両郷から各1頭ずつ馬を出し、2頭で流鏑馬を行います。

家臣団の強い団結と誇り

特定の家で続ける流鏑馬の課題は後継者の問題と毎回の経済的負担です。地域で行う流鏑馬の場合、その費用は大勢で負担することができますが、家や一族が継承する場合は必然的に個人負担が大きくなります。現代社会にあって昔からの形で流鏑馬を行っていくことは大変な困難が伴います。では、そうまでして流鏑馬を継続する理由はどこにあるのでしょうか。

その理由を保存会の人たちは異口同音に「源義仲の家臣」だからと言います。家臣団の強い団結と誇りが今も人びとの強い信念として生き続けています。また、流鏑馬を行うことで自らの先祖を敬い、供養する意志を毎回確認しているのでしょう。毛呂山の流鏑馬とともに長く続いてほしい祭りです。

流鏑馬に向かう2頭の射手
（ときがわ町　萩日吉神社の流鏑馬）